

3 寺と庭だ

※題字／森川芳聲



もくじ

- 2 巻頭言 目に見える鬼・見えぬ鬼…… 山口 秀範
- 3 「社中」だより…… 高見澤玉江
- 4 「偉人レポート」…… 安木 南
- 6 良書案内…… 山口 秀範
- 7 ミヤンマーと日本⑤…… 守田 剛
- 8 民間人から見た教育現場⑨…… 小田村直昌
- 9 伊達政宗「馬上少年過ぐ」をめぐって③… 廣木 寧
- 10 TERA KOYAふおとればーと
- 11 “あちこちde寺子屋”のご案内
- 12 歌碑のこころ(10) 編集余録 余録の余録



福津市勝浦・あんずの里運動公園

歌碑のこころ

おおなむら すくなひこな

大汝少彦名の神こそは名づけ始めけめ

名のみを名兒山と負ひてわが恋の

千重の一重も慰めなくに

大國主神と少彦名神が国土の山川に名づけをお始めになり、ここから見える山には心がなごむという「なご」の名を頂いているのに、私のあふれる恋心を少しも和めず、慰めてはくれないのだなあ。

※詳しい解説は12頁に掲載しています

目に見える鬼・見えぬ鬼

代表世話役 山口 秀範

鬼会

大分県国東市の友人の招きで、当地に伝わる「修正鬼会」を体験しました。暖冬のため雪ならぬ雨中の「成仏寺」境内に大松明が掲げられ、昼夜続いた勤行の後で愈々鬼の登場です。

若い僧侶が扮する三人の鬼（「災払鬼」、「荒鬼」・「鎮鬼」）は、手にした松明で参拝者の肩や背中を叩いて無病息災を祈禱します。その後、鬼は寺を飛び出して集落の家々を巡り、里人の幸と五穀豊穡を祈願しつつ深夜までもてなしを受けま

す。ここでの鬼は先祖の化身と信じられており、災いを為す恐ろしい存在とは無縁



鬼会

のようです。千年以上前の神仏混淆に起源を持つ旧正月の奇祭に、夜通し飲みながら触れて令和初の新春を過ごすことが出来ました。翌週の節分の豆まきでは「鬼は外」と追い出すことを憚られる心境になっていました。

泣いた赤鬼

鬼は怖いばかりではないと教えてくれたのは、小学生の頃読んだ浜田廣介の『泣いた赤鬼』でした。「ココロノヤサシイオノウチデス ドナタデモ オイデクダサイ」と立て札を出したのに、疑心暗鬼の村人は誰も訪ねて来ません。

その悩みを解消してくれたのは友人の青鬼でした。わざと乱暴を働く青鬼を赤鬼が懲らしめるという筋書き通りに振る舞って、村人の信頼を勝ち得た赤鬼は、毎日人間たちと楽しく交流できるようになります。

一方で、あれ以来顔を見せない青鬼のことが気がかりな赤鬼は、友人の家まで足を運び、書き置きを見つけます。「赤鬼くん、人間たちと仲良くして、楽しく暮らしてください。（このまま君と付き合っていると、君も悪い鬼だと思われるかも

しれないので）ぼくは、旅に出るけれども、いつまでも君を忘れません……どこまでも君の友達、青鬼」。

胸を締め付けられるやるせなさ、世の中を人間中心にばかり見る身勝手さを、この童話から学んだなあとも今も懐かしく想起されます。

「鬼会」の鬼や泣いた赤鬼は姿を現しませんでした。多くの鬼は目に見えず私たちの心に巣食っているでしょう。時として私たちを惑わせたり臆病にさせた。鬼たちは二十一世紀の今もこの世に跋扈しています。

新型コロナウイルス

世は挙げて新型コロナウイルスに振り回されています。さしずめ節分の鬼が日本列島に棲みついたかの感があります。目に見えるウィルスの蔓延に恐れ、人の集まる催しは次々と中止・延期の決定がなされつつあります。

様々な論評がマスコミに溢れています。徒に危機を煽ったり、行政対応の不備を論うものばかりが目につきます。政府の総合的な基本方針が二月二十五日に出されたので、国民の一員としてまずは遵守し、国難を克服するという心構えを固めたいものです。

元厚生労働省結核感染症課長・三宅邦明氏の見解——「（これから数ヶ月流行が続くとの想定で）経済生活や日常生活を持続できる形で、感染対策を行うこと。やり過ぎもいけないし、やらな過ぎもいけ

ません。適切に怖がり、適切に日常生活をして行くことが大切」——には同感を禁じ得ません。

中世のペストや大正時代のスペイン風邪と比べれば、「新型」であつてもその正体はかなり掴めているわけで、言わば鬼の姿は遠くに見えているようです。現代医学の力を信じ、同時に文明が人間の生命力を削ぐことも知っておくべきでしょう。

かつてナイジェリアで、水道の蛇口をひねつても濁った水しか出ない田舎の村に、近代工場を建設した時のことです。現場には大きなタンクが据え付けられて、濾過した水を工事に使いました。

（我々の飲み水はそれを更に煮沸して冷ましたもの）地元の労働者たちは帰宅時にヘルメット一杯濾過水を持ち帰り、家族の飲み水にしたのです。やがて工事は終わり元の水道水を飲むこととなり、工事前にはかつてなかった酷い下痢が村中に蔓延したとのこと。

他方で、風土病のマラリヤを媒体する蚊から逃れることは不可能で我々も全員蚊に刺されます。しかし、栄養を摂り、睡眠充分な生活を続けている日本人は殆んど発病することはなかったのです。

私の四十年前のアフリカ体験を絶対視する愚は避けねばなりません。鬼の正体を見極めつつ、賢い対応を心掛けたいものです。寺子屋モデル会議室でも来訪者の手洗いを励行しています。